

大学における新構想型学部に関する実態調査

1998年4月

科学技術庁 科学技術政策研究所

第1調査研究グループ

吉田 通治

神田 由美子

前澤 祐一

Survey and research into state of
multi-disciplinary faculties in universities

April 1998

Michiharu Yoshida, Yumiko Kanda, Yuichi Maezawa
First Policy-Oriented Research Group

National Institute of Science and Technology Policy
(NISTEP)

Science and Technology Agency

目次

1. はじめに	1
1. 1 調査目的	1
1. 2 調査内容	1
2. 新構想型学部学生の動向	4
2. 1 系統別新構想型学部の動向	4
2. 1. 1 入学志願者数	4
2. 1. 2 入学者数	5
2. 1. 3 入学倍率	6
2. 2 理・工学部と新構想型学部の比較	7
2. 2. 1 入学志願者数	7
2. 2. 2 入学者数	9
2. 2. 3 入学倍率	11
3. 主要大学における新構想型学部の実態	14
3. 1 学部設立の経緯	14
3. 2 学部としての新たな試み	16
3. 3 新構想型学部学生	17
3. 3. 1 学生の質	17
3. 3. 2 入試形態	18
3. 3. 3 学部と学生間のミスマッチ	18
3. 4 学生の卒業後の進路	20
3. 4. 1 進路状況	20
3. 4. 2 学生と企業間のミスマッチ	20
3. 5 学部の今後の課題	21
3. 6 その他	23
4. まとめ	24
参考文献	26
謝辞	26
5. 統計表	27

1. はじめに

1. 1 調査目的

現在の日本における大学の学部のほとんどは、文系・理系のどちらかに分類され、またさらに各々が細分化されている。これらの専門指向型の学部は、学部間・学科間の壁が非常に高く、他の学部・学科の講義を受けることは非常に困難である。また最近では、この細分化（専門化）がさらに進んでいく傾向にある。

一方で、最近起こっている社会問題（環境問題、高齢化問題、臓器移植問題等）は、1つの専門分野の専門家では解決することは出来ない、様々な分野の要因が複雑に絡み合った大変難しいものとなっている。これらの問題を今後解決していくには、ある一つの専門分野の領域にとらわれない幅広い視野を持った人材の育成・活用や、各専門分野の専門家達による共同研究等が必要不可欠である。

また、日本の大学では4、5年前から大きな変革の波が押し寄せている。それは、これまでの日本の大学の伝統であった縦割り構造をうち破る、学際的な学部が増加してきているのである。つまり、これまでの理系・文系の専門学部とは違う、また文理学部とも違った、文系・理系の枠を越えた新しい構想の学部である（以後、これらの学部を「新構想型学部」と称する）。

これまで、「科学技術人材＝理系の人材」という図式が成り立ってきた。しかし、社会と科学技術との関わり合いが、今後より一層密接になってくると考えられ、また、社会がこのような大きく様変わりしてきていることから、この図式が成り立たなくなっている。従って、今後はこれらの新しいタイプの人材が、新たな科学技術人材として大きく期待されている。

しかし、現在のところ新構想型という定義はない。また、各大学のこのような新設学部における新たな試みの実態や、特色、学生の卒業後の進路等についてはよく把握されていないのが現状である。

そこで、本報告は、いくつかの大学の新構想型学部における状況や実態について、統計やインタビューを用いて調査を行ったものである。

1. 2 調査内容

本報告書は、1)「文部省 学校基本調査報告」による、学部入学志願者数、学部入学者数等の統計データと、2)実際にいくつかの大学を訪問して行った、学部の実態に関するインタビュー調査を行った結果の報告である。

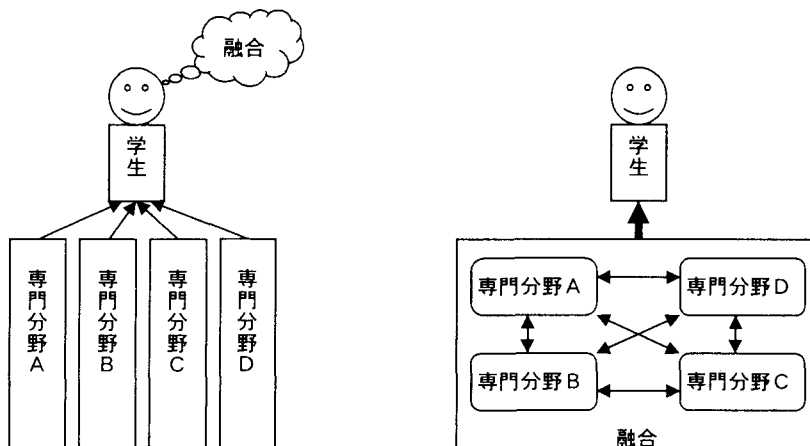
新構想型学部とは何か

学際化が成立するには、その前提として確立された学問の専門分野が必要である。従って、学際化とは、既存の学問の専門分野を相互に関連づけることである。しかし、学問の学際化といってもその手法は様々である。その中で、いま日本の大学が取り組んでいる学際化の手法は大きく分けると、マルチディシプリナリ（Multi-disciplinary）とインターディシプリナリ（Inter-

disciplinary) の2つに分けられる。

ここで、マルチディシプリナリとは、複数の学問の専門分野を学生が学び、学生自身の中で融合されるものである(図1-1(A)参照)。また、インターディシプリナリとは、複数の学問の専門分野が相互作用し、新しい構造の知識体系の構築がなされたもの(融合されたもの)を、学生が学ぶものとする(図1-1(B)参照)。

図1-1 マルチディシプリナリとインターディシプリナリ



(A) マルチディシプリナリ

(B) インターディシプリナリ

最近、新設される学際的な学部や、新たな学部としての試みとして行われている学際化の多くは、マルチディシプリナリ的手法であり、主として文系の専門分野と理系の専門分野が複合している。従って、本報告で扱う新構想型学部は、マルチディシプリナリ的手法で学際化の試みを行っている学部に限定する。

新構想型学部の選定

新構想型学部を持つ国公立大学と私立大学の大学名と学部名を表1-1に示す。この表に掲載される大学および学部名は、「文部省 学校基本調査報告書」より、日本の大学の全学部名の中から、既存の専門学部の名称には現れることのない、総合、人間、情報・コミュニケーション、環境をキーワードに持つ学部を抽出し、学部設立の経緯や教育理念等から選定した、49大学52学部である。「文部省 学校基本調査報告」では、これらの新しいタイプの学部は既存の学問分野の中に組み入れて計上しているため、個別に集計する以外にこれらの学部の統計は存在しない。従って、本調査では表1-1に示す学部をもとに「文部省 学校基本調査報告」を用いて集計を行った。ただし、同名の学部の中には新構想型学部には該当しない学部も存在するが、統計上これらの学部も含まれるとする。また、逆に名称の上では既存型学部には分類されるが、内容的には学際的な学部も存在する。しかし、それらの学部は今回の調査から除外されている。このカテゴリーの代表的なものは教養学部である。また、理学部や工学部でも部分的には学際化現象が見

られる。これらの学部の解明には、学科ないし専攻レベルでより詳しく見ていく必要がある。

訪問大学はこの中から、学部から卒業生がでている（又はでる）事を条件として、7校8学部を選定した。

表1-1 日本における新構想型学部を持つ大学

国公立大学	計15大学16学部
京都大学：総合人間学部（'92）、大阪大学：人間科学部（'72）、名古屋大学：情報文化学部（'94）、 神戸大学：発達科学部（'92）、広島大学：総合科学部（'74）、熊本県立大学：総合管理学部（'94）、 岡山大学：環境理工学部（'94）、静岡大学：情報学部（'95）、滋賀県立大学：人間文化学部（'95）・ 環境科学部（'95）、徳島大学：総合科学部（'86）、群馬大学：社会情報学部（'93）、奈良女子大 学：生活環境学部（'93）、福岡女子大学：人間環境学部（'94）、島根大学：総合理工学部（'95）、 福岡県立大学：人間社会学部（'92）	
私立大学	計34大学36学部
慶應義塾大学：環境情報学部（'90）・総合政策学部（'90）、早稲田大学：人間科学部（'87）、中 央大学：総合政策学部（'93） 関西大学：総合情報学部（'94）、関西学院大学：総合政策学部（'95）、 神戸女学院大学：人間科学部（'93）、文教大学：人間科学部（'76）・情報学部（'80）、和光大学： 人間関係学部（'95）、東京経済大学：コミュニケーション学部（'95）、日本女子大学：人間社会 学部（'95）、東洋英和女学院大学：人間科学部（'95）、大阪工業大学：情報科学部（'96）、東京 情報大学：経営情報学部（'88）、東京国際大学：人間社会学部（'95）、大阪電気通信大学：情報 工学部（'95）、ノートルダム清心女子大学：人間生活学部（'96）、兵庫大学：経済情報学部（'95）、 姫路獨協大学：経済情報学部（'89）、藤女子大学：人間生活学部（'92）、札幌学院大学：社会情 報学部（'91）、仙台白百合女子大学：人間学部（'96）、駿河台大学：文化情報学部（'94）、淑徳 大学：国際コミュニケーション学部（'96）、名城大学：都市情報学部（'95）、帝京平成大学：情 報学部（'87）、新潟国際情報大学：情報文化学部（'94）、中京大学：情報科学部（'90）、愛知み ずほ大学：人間科学部（'93）、大阪国際女子大学：人間科学部（'92）、広島工業大学：環境学部 （'93）、北海道情報大学：経営情報学部（'94）、十文字学園女子大学：社会情報学部（'96）、 流通経済大学：流通情報学部（'96）、武庫川女子大学：生活環境学部（'94）	

注：（）内の数字は設立年度を示す。

資料：文部省 「学校基本調査報告（平成8年度）」、東洋経済新報社 「日本の大学（1998年度版）」（河合塾調べ）より選定

2. 新構想型学部学生の動向

「文部省 学校基本調査報告」の統計データを用いて、新構想型学部における学部入学志願者数、学部入学者数、入学倍率（学部入学志願者数／学部入学者数）の過去7年間の推移について以下に示す。

2. 1 系統別新構想型学部の動向

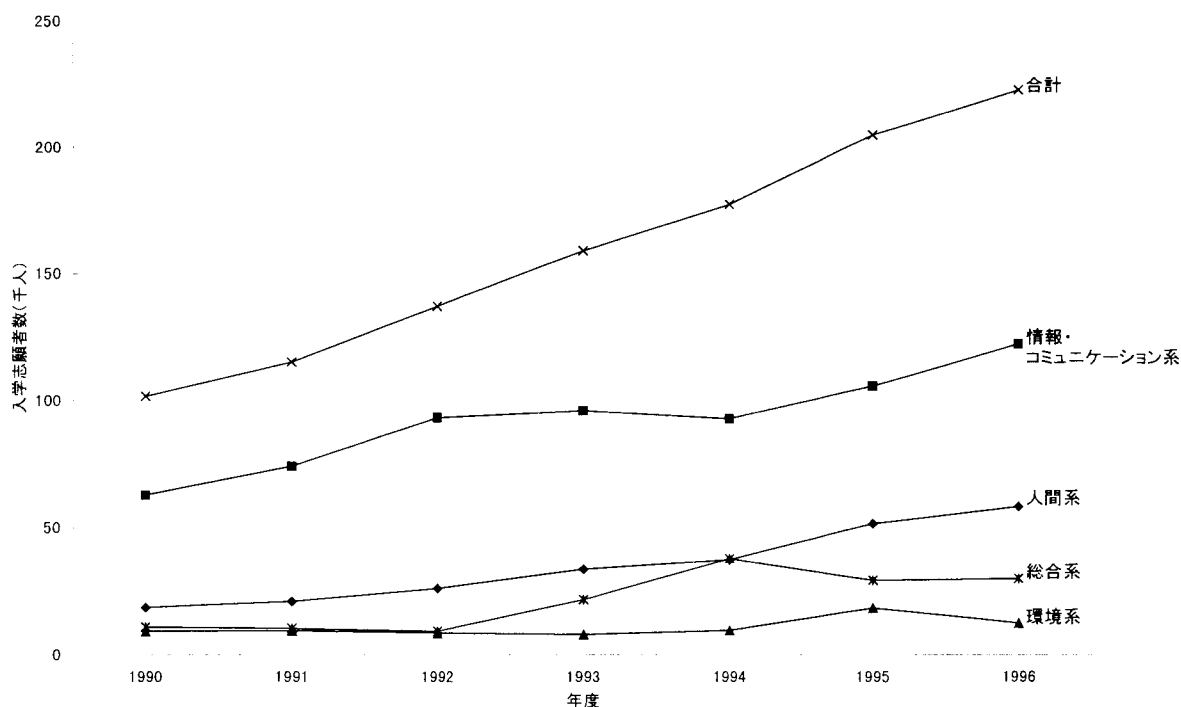
本項では、学部の名称から各学部を総合系学部、人間系学部、情報・コミュニケーション系学部、環境系学部の4つに分類して、入学志願者数、入学者数、入学倍率について比較を行う。

2. 1. 1 入学志願者数

系統別で1990年度から1996年度までの入学志願者数の推移を図2-1と表2-1に示し、それらを比較する。これを見ると、情報・コミュニケーション系学部、人間系学部、総合系学部の入学志願者数が増加していることがわかる。その増加率を1990年度と1996年度の値で比較すると、情報・コミュニケーション系学部（1.9倍）、人間系学部（3.1倍）、総合系学部（2.7倍）である。

全体的に見ると、入学志願者数は1990年度で101,623人だったものが、1996年度には222,508人に増加し、その増加率は2.2倍となっている。

図2-1 系統別新構想型学部の入学志願者数の推移



注：ここでの入学志願者数の値は、延べ入学志願者数の値である。

参照：表2-1

表 2 - 1 系統別新構想型学部の入学志願者数

系統別学部名	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	10,960	10,438	9,203	21,651	37,701	29,130	29,775
人間系学部	18,648	20,969	26,111	33,552	37,305	51,557	58,183
情報・コミュニケーション系学部	62,829	74,107	93,171	95,877	92,728	105,695	122,132
環境系学部	9,186	9,517	8,556	7,988	9,586	18,321	12,418
合計	101,623	115,031	137,041	159,068	177,320	204,703	222,508

参照：表 5 - 1、表 5 - 4、表 5 - 7、表 5 - 10、表 5 - 13

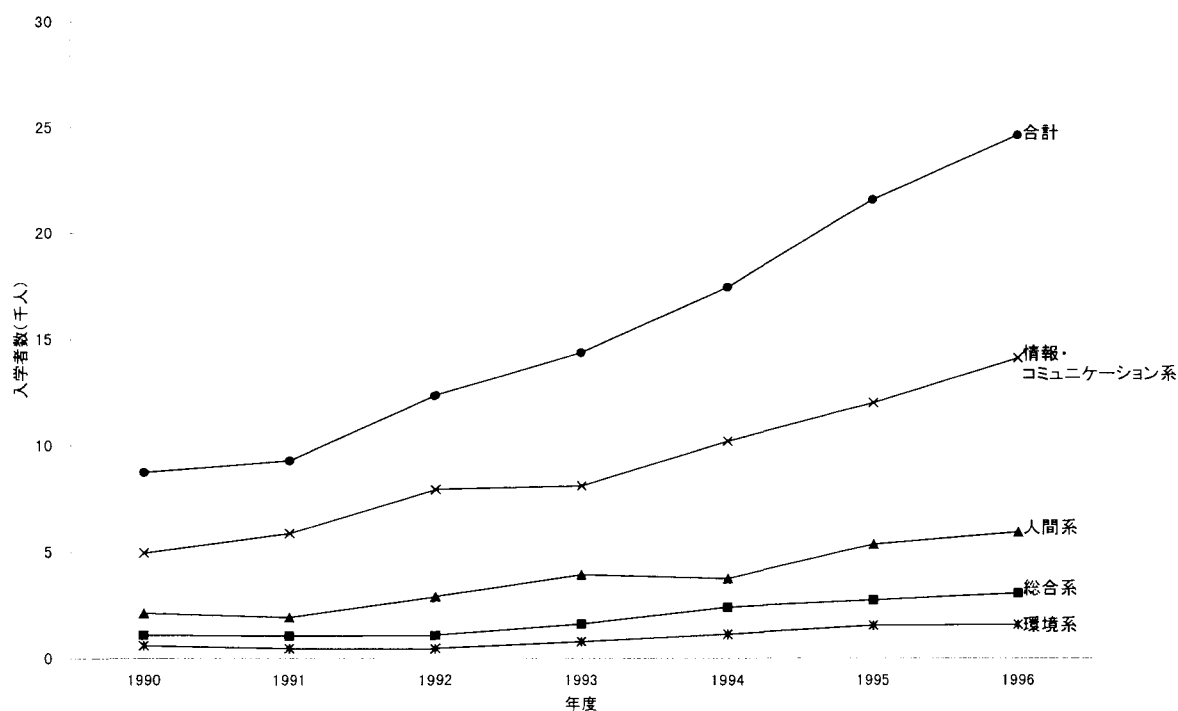
資料：文部省「学校基本調査報告」

2. 1. 2 入学者数

系統別で1990年度から1996年度までの入学者数の推移を図2-2と表2-2に示し、それらと比較する。これを見ると、4つの学部全てにおいて入学者数が増加していることがわかる。1990年度の値と1996年度の値を比較した増加率は、総合系学部（2.8倍）、人間系学部（2.8倍）、情報・コミュニケーション系学部（3.0倍）、環境系学部（2.7倍）である。

全体的に見ると、入学者数は1990年度で8,729人だったものが、1996年度には24,619人に増加し、その増加率は2.8倍となっている。

図 2 - 2 系統別新構想型学部の入学者数の推移



参照：表 2 - 2

表 2 - 2 系統別新構想型学部の入学者数

系統別学部名	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	1,088	1,042	1,078	1,592	2,391	2,729	3,045
人間系学部	2,114	1,922	2,880	3,902	3,739	5,330	5,911
情報・コミュニケーション系学部	4,940	5,851	7,916	8,083	10,184	11,981	14,099
環境系学部	587	461	460	767	1,131	1,538	1,564
合計	8,729	9,276	12,334	14,344	17,445	21,578	24,619

参照：表 5 - 2、表 5 - 5、表 5 - 8、表 5 - 11、表 5 - 14

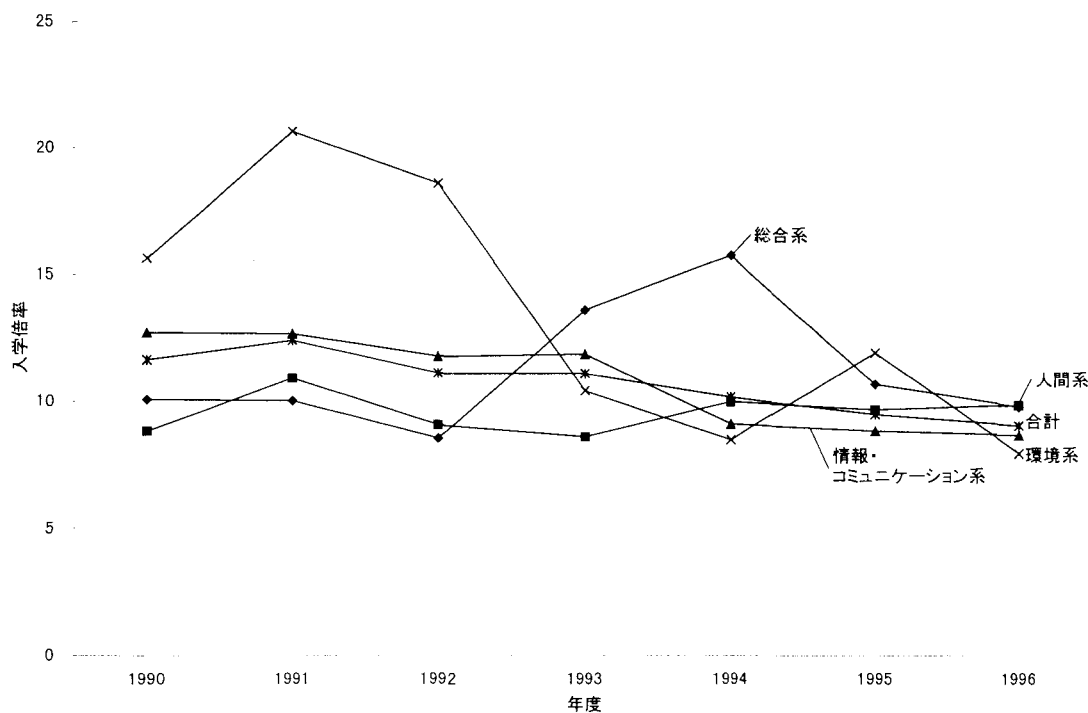
資料：文部省「学校基本調査報告」

2. 1. 3 入学倍率

系統別で 1990 年度から 1996 年度までの入学倍率の推移を図 2 - 3 と表 2 - 3 に示し、それらを比較する。ここでの入学倍率は、入学志願者数 / 入学者数である。これを見ると、各学部ともその推移は横ばいもしくは減少傾向にあることがわかる。

過去 7 年間に於いて、変動が大きいのは総合系学部、環境系学部である。

図 2 - 3 系統別新構想型学部の入学倍率の推移



参照：表 2 - 3

表 2 - 3 系統別新構想型学部の入学倍率

系統別学部名	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	10.1	10.0	8.5	13.6	15.8	10.7	9.8
人間系学部	8.8	10.9	9.1	8.6	10.0	9.7	9.8
情報・コミュニケーション系学部	12.7	12.7	11.8	11.9	9.1	8.8	8.7
環境系学部	15.6	20.6	18.6	10.4	8.5	11.9	7.9
合計	11.6	12.4	11.1	11.1	10.2	9.5	9.0

注：入学倍率＝入学志願者数／入学者数である。

参照：表 5 - 3、表 5 - 6、表 5 - 9、表 5 - 12、表 5 - 15

資料：文部省「学校基本調査報告」

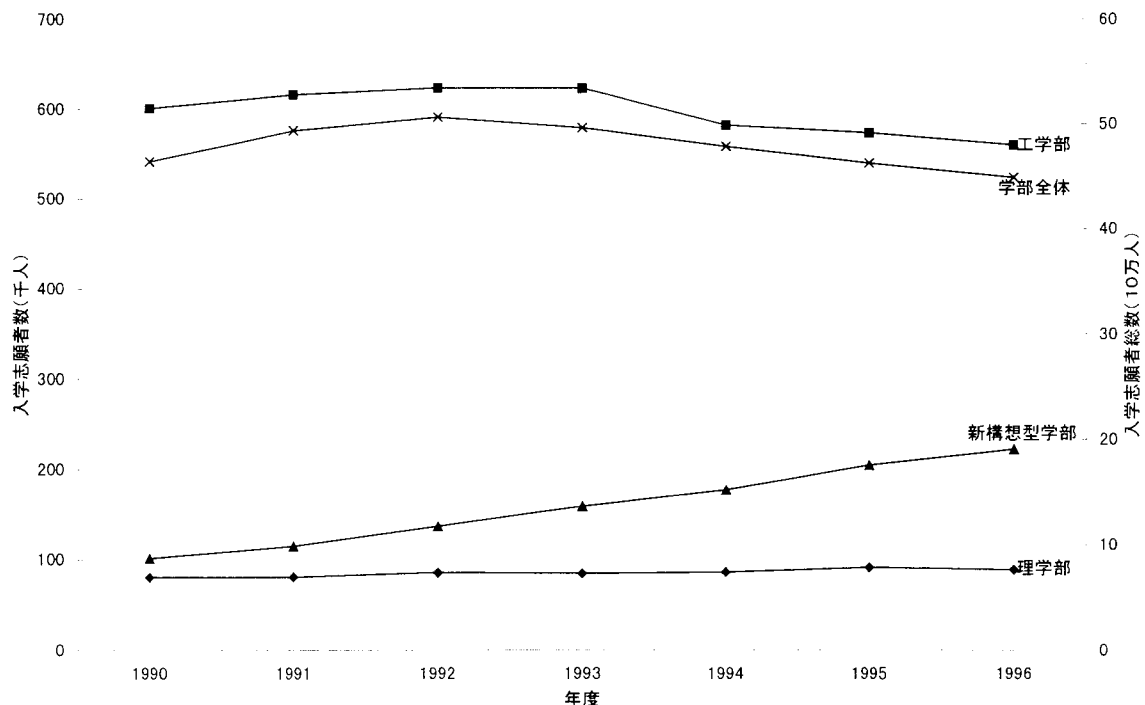
2. 2 理・工学部と新構想型学部の比較

本項では、既存の専門学部である理・工学部と新構想型学部の3学部において、入学志願者数、入学者数、入学倍率について比較を行う。

2. 2. 1 入学志願者数

1990年度から1996年度までの各学部の入学志願者数の推移を図2-4と表2-4に示し、それらを比較する。これを見ると、理・工学部の推移がほぼ横ばいもしくは減少傾向にあるのに対して、新構想型学部は増加傾向にあることがわかる。

図 2 - 4 理・工学部と新構想型学部の入学志願者数の比較



参照：表 2 - 4

表 2 - 4 理・工学部と新構想型学部の入学生志願者数

年度	理学部	工学部	新構想型学部	学部全体
1990	80,306	600,699	101,623	4,639,980
1991	80,958	615,782	115,031	4,937,867
1992	85,615	623,367	137,041	5,062,862
1993	84,774	622,938	159,068	4,962,863
1994	86,470	581,923	177,320	4,785,380
1995	91,741	573,536	204,563	4,627,854
1996	88,927	560,066	221,108	4,489,430

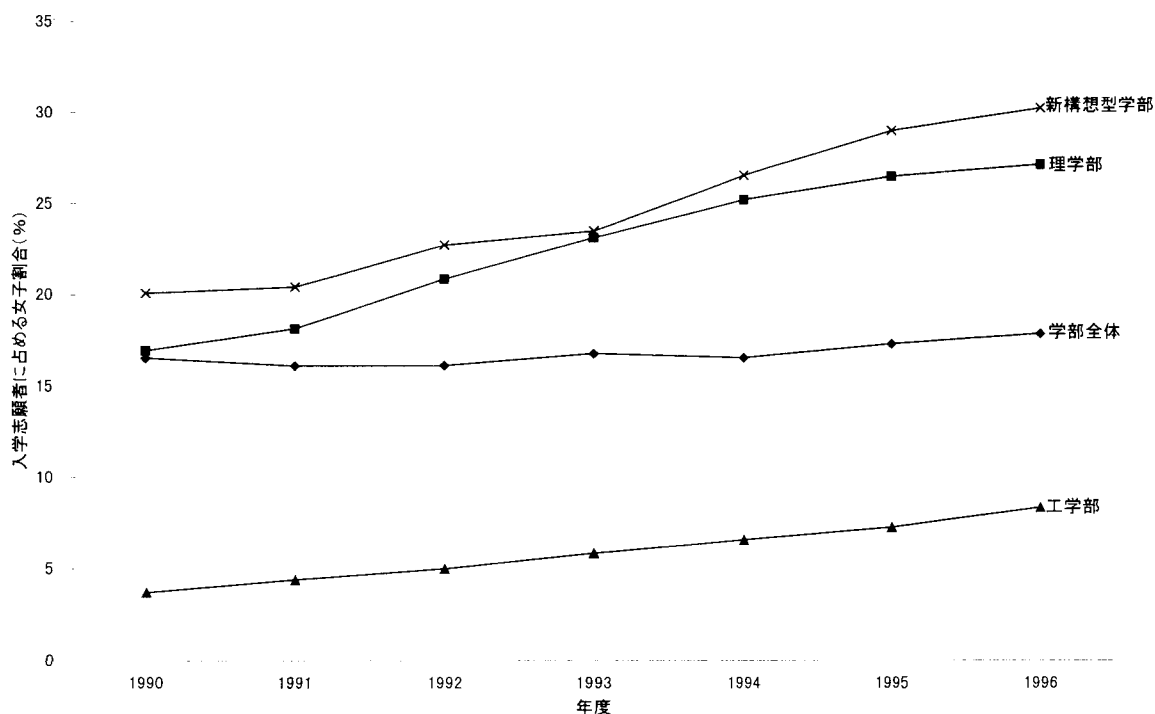
参照：表 5 - 1、表 5 - 1 6

資料：文部省「学校基本調査報告」

1990年度から1996年度までの各学部における入学志願者に占める女子の割合の推移を図2-5と表2-5に示し、それらを比較する。これをみると、各学部とも女子の割合が増加傾向にあることがわかる。その増加率を1990年度の値と1996年度の値とで比較してみると、理学部（1.6倍）、工学部（2.2倍）、新構想型学部（1.5倍）である。

3学部の中で最も入学志願者に占める女子の割合が大きいのは、新構想型学部であり、その割合は約30%である。この値は3学部の中で最も低い工学部の値（約8%）と比較すると約4倍に相当する。

図 2 - 5 理・工学部と文新構想型学部の入学生志願者における女子割合の比較



参照：表 2 - 5

表 2 - 5 理・工学部と新構想型学部の入学者における女子割合

(%)

年度	理学部	工学部	新構想型学部	学部全体
1990	16.9	3.7	20.1	16.5
1991	18.1	4.4	20.4	16.1
1992	20.8	5.0	22.7	16.1
1993	23.1	5.8	23.5	16.7
1994	25.2	6.6	26.5	16.5
1995	26.5	7.2	29.0	17.3
1996	27.1	8.3	30.3	17.8

注：女子割合＝入学志願者数（女子）／入学志願者数（全体）×100である。

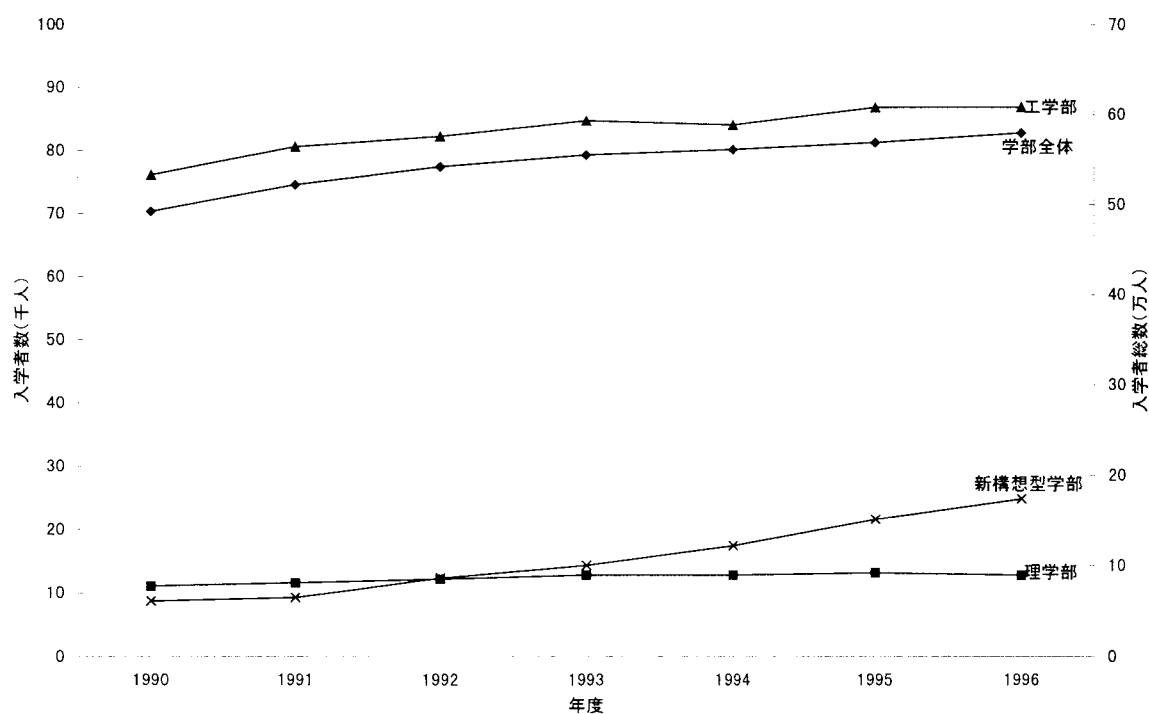
参照：表 5 - 1，表 5 - 16

資料：文部省「学校基本調査報告」

2. 2. 2 入学者数

1990年度から1996年度までの各学部の入学者数の推移を図2-6と表2-6に示し、それらと比較する。これを見ると、理学部は横ばい傾向であるが、他の2学部は増加傾向にあることがわかる。その増加率を1990年度の値と1996年度の値とで比較してみると、工学部（1.1倍）、新構想型学部（2.8倍）であり、相対的に新構想型学部の増加率が高くなっている。

図 2 - 6 理・工学部と新構想型学部の入学者数の比較



参照：表 2 - 6

表2-6 理・工学部と新構想型学部の入学者数

年度	理学部	工学部	新構想型学部	学部全体
1990	11,087	76,117	8,729	492,340
1991	11,607	80,608	9,276	521,899
1992	12,139	82,213	12,334	541,604
1993	12,822	84,677	14,344	554,973
1994	12,833	84,033	17,445	560,815
1995	13,140	86,823	21,578	568,576
1996	12,748	86,840	24,491	579,148

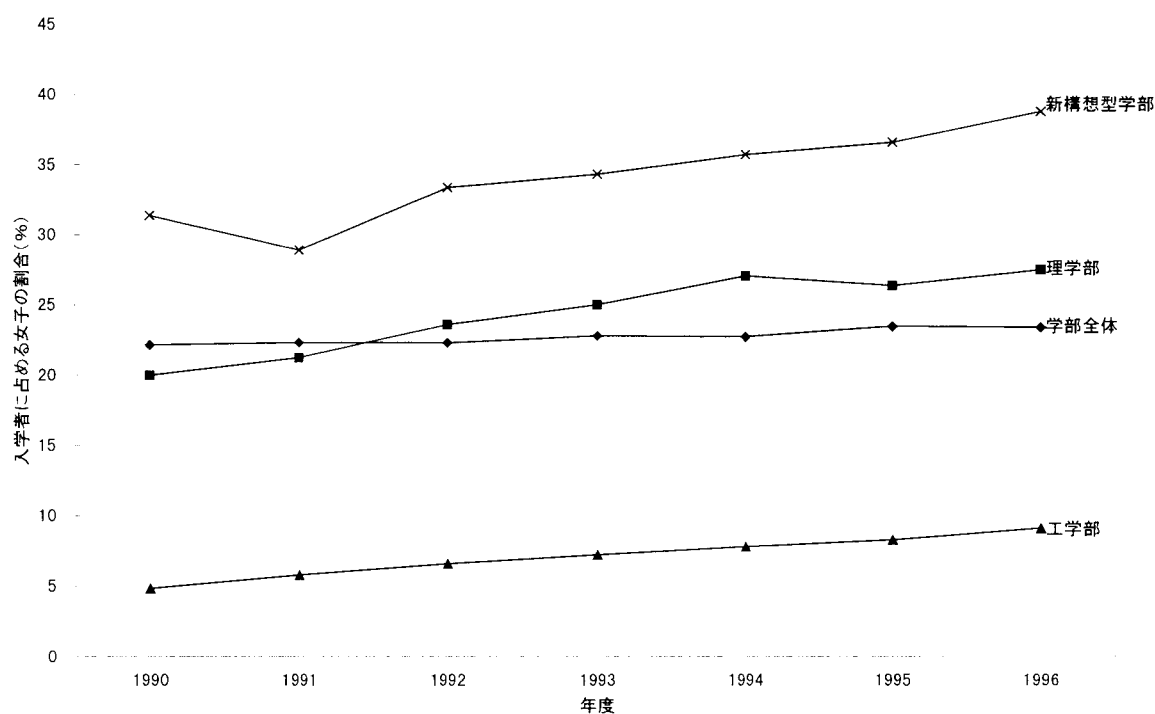
参照：表5-2，表5-17

出典：文部省 学校基本調査報告

1990年度から1996年度までの各学部における入学者に占める女子の割合の推移を図2-7と表2-7に示し、それらを比較する。これをみると、各学部とも女子の割合が増加傾向にあることがわかる。その増加率を1990年度の値と1996年度の値とで比較してみると、理学部（1.4倍）、工学部（1.9倍）、新構想型学部（1.2倍）である。

3学部の中で最も入学者に占める女子の割合が大きいのは、新構想型学部であり、その割合は約40%である。この値は3学部の中で最も低い工学部の値（約7%）と比較すると約6倍に相当する。

図2-7 理・工学部と新構想型学部の入学者における女子割合の比較



参照：表2-7

表 2 - 7 理・工学部と新構想型学部の入学者における女子割合

(%)

年度	理学部	工学部	新構想型学部	学部全体
1990	20.0	4.8	31.4	22.1
1991	21.2	5.8	28.9	22.3
1992	23.6	6.6	33.3	22.3
1993	25.0	7.2	34.3	22.8
1994	27.0	7.8	35.7	22.7
1995	26.3	8.3	36.6	23.5
1996	27.5	9.1	39.0	23.4

注：女子割合＝入学者数（女子）／入学者数（全体）×100である。

参照：表 5 - 2、表 5 - 17

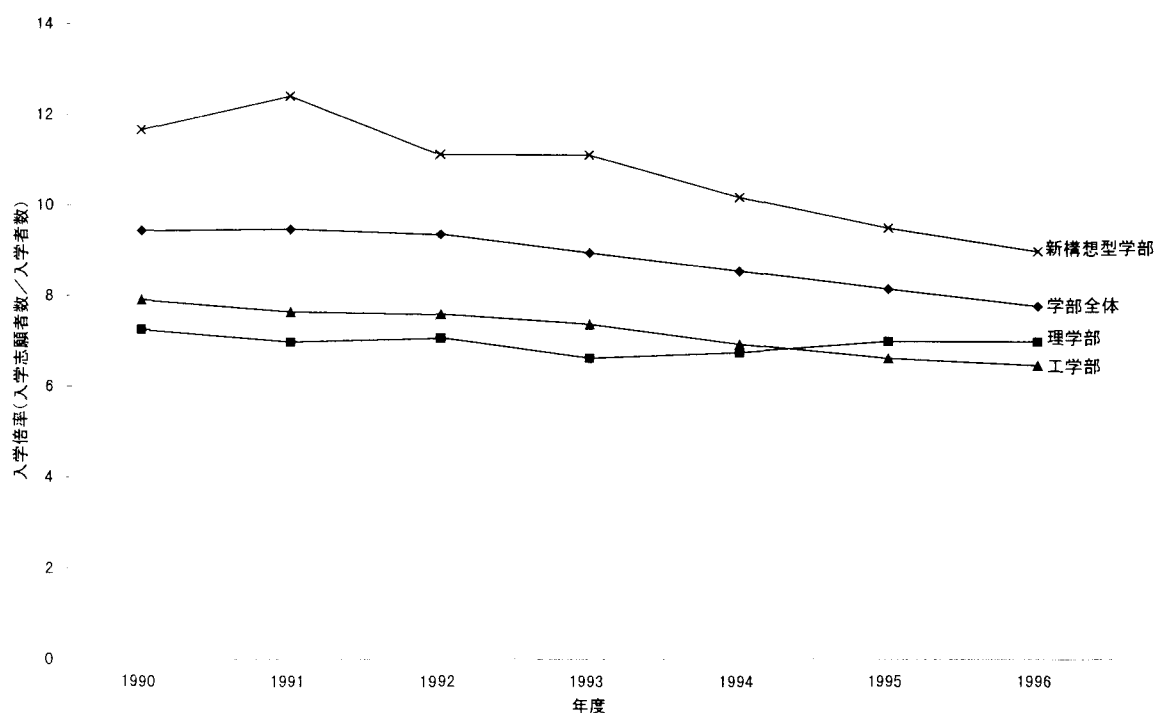
出典：文部省「学校基本調査報告」

2. 2. 3 入学倍率

1990年度から1996年度までの各学部の入学倍率の推移を図2-8と表2-8に示し、それらと比較する。これを見ると、新構想型学部は、理・工学部と比較すると入学倍率の値が高く、人気が高いことがわかる。

全体的に入学倍率は、新構想型学部と工学部は減少傾向であり、理学部は増加傾向にある。

図 2 - 8 理・工学部と新構想型学部の入学倍率の比較



参照：表 2 - 8

表2-8 理・工学部と新構想型学部の入学倍率

年度	理学部	工学部	新構想型学部	学部全体
1990	7.2	7.9	11.6	9.4
1991	7.0	7.6	12.4	9.5
1992	7.1	7.6	11.1	9.3
1993	6.6	7.4	11.1	8.9
1994	6.7	6.9	10.2	8.5
1995	7.0	6.6	9.5	8.1
1996	7.0	6.4	9.0	7.8

注：入学倍率＝入学志願者数／入学者数である。

参照：表5-3、表5-18

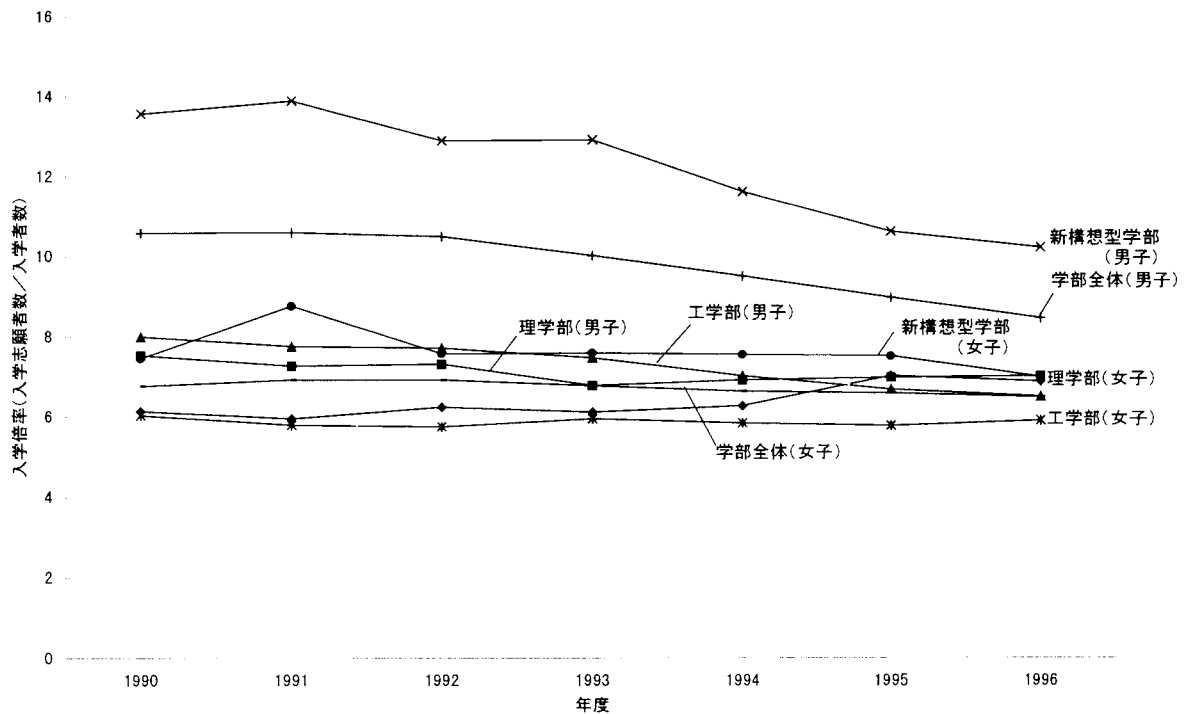
資料：文部省「学校基本調査報告」

1990年度から1996年度までの各学部における男女別入学倍率の推移を図2-9と表2-9に示し、それらを比較する。これを見ると、新構想型学部（男子）の値が最も高く、工学部（女子）の値が最も低い。

新構想型学部は、理・工学部とは違い、男子・女子の両方とも、各々の学部全体の値よりも高い値を示している。

全体的にみると、理学部（女子）が増加傾向にある他は、みなほぼ横ばい、もしくは減少傾向である。

図2-9 理・工学部と新構想型学部の男女別入学倍率の比較



参照：表2-9

表 2 - 9 理・工学部と新構想型学部 of 男女別入学倍率

年度	理学部		工学部		新構想型学部		学部全体	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1990	7.5	6.1	8.0	6.0	13.6	7.4	10.6	6.8
1991	7.3	5.9	7.8	5.8	13.9	8.8	10.6	6.9
1992	7.3	6.2	7.7	5.7	12.9	7.6	10.5	6.9
1993	6.8	6.1	7.5	5.9	12.9	7.6	10.0	6.8
1994	6.9	6.3	7.0	5.8	11.6	7.5	9.5	6.6
1995	7.0	7.0	6.7	5.8	10.6	7.5	9.0	6.6
1996	7.0	6.9	6.5	5.9	10.3	7.0	8.5	6.5

注：入学倍率＝入学志願者数／入学者数である。

参照：表 5 - 3、表 5 - 1 8

資料：文部省「学校基本調査報告」

3. 主要大学における新構想型学部の実態

2章では、「文部省 学校基本調査報告」による統計データから、新構想型学部の学生の動向を調査した。

そこで本章では、これらの学部では、どのような環境で、どのような教育が行われ、どのような人材が社会に輩出されているのか、まだよく把握されていないその実態について調査を行った。

調査方法は、新構想型学部を持つ大学7校8学部を訪問し、以下の質問項目に沿ってインタビューを行った。

- ・学部設立の経緯
- ・学部としての新たな試み
- ・授業形態
- ・学生の質
- ・学生の卒業後の進路
- ・学部と学生間のミスマッチ
- ・学生と企業間のミスマッチ
- ・学部の今後の課題
- ・その他

以下に、各項目毎に筆者らの調査意識、調査結果、調査結果をふまえた考察について述べる。

3. 1 学部設立の経緯

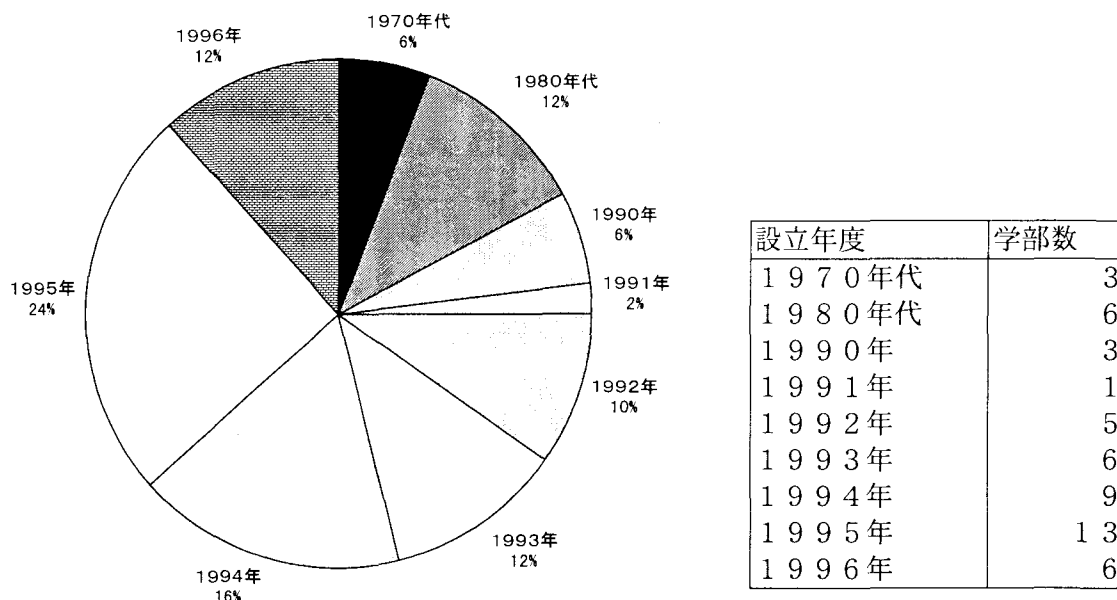
新構想型学部の学部設立の経緯をみってみる。最近新設されている新構想型学部の多くは、1991年6月の文部省における「大学設置基準¹等の大綱化²」に伴い、各大学での既存の教養部の見直しや、現代の日本の高度情報化社会に対応する人材、今後複雑化していく（様々な分野の要因を併せ持った）社会問題に取り組む人材の育成・活用を目的とて、新たに誕生している。

図3-1に、表1-1に示した新構想型学部の設立年度別割合を示す。これをみると、74%の学部が1992年度以降に新設されており、この「大学設置基準等の大綱化」が新構想型学部の増加に大きく影響していることが伺える。

¹ 設置基準：学校の設置者は、学校の種類（大学、大学院、短期大学、高等専門学校）に応じ、監督庁（文部省）の定める設備・編制・その他に関する設置基準に従い、これを設置しなければならない。（学校教育法第3条）

² 大綱化：これまでの一般教育、外国語、保健体育、専門教育という科目区分や、それぞれに必要な単位数の規定を廃止するなど基準を大幅に大綱化。

図 3 - 1 新構想型学部の設定年度別割合



新構想学部としての基本は、マルチディシプリナリである。これは、複数の専門分野（文系と理系の専門分野）が学部内に講座や学科として設けられており、異分野の講義を学生は選択して受けることが出来るシステムになっている。この新構想型学部の設立方式は、大きく分けると2つの場合に分けられる。

- 1) 既存の教養部や教育学部等を母体とし、新たに専門学部の教官を交えて、内部の構成を再編成して新設されたもの
- 2) 全く新しい学部として、学校内外から複数の専門分野の教官を集めて新設されたもの

1) の場合の教官組織は、教授の入れ替わりはあまり行われな（学部の教官全てが改編前の既存学部の教官で構成される場合もあれば、全体の何割かを専門学部の教官と入れ替えて構成する場合もある）。このため、設立当初から学部内での教授同士は、お互いに面識があるので、学部運営上、教官組織の中で問題はさほど生じない。一方で、専門学部として予算が倍増し、質の高い施設や設備が揃うようになって、それらを有効に使い切るだけの力やスペースがないといった問題が起きている。

2) の場合、全く新しい学部ということで各大学では専用のキャンパスや施設を先に用意しておく場合が多い。この場合、はじめからそれ専用設計されて建設されているため、設備面では不自由さはないようである。しかし、新しいキャンパスを建てるということになると広大な土地を準備しなければならず、必然的に交通の便が不便な郊外や山の上になってしまったことが悩みのようなのである。また、異なる専門学部の教授が、初めて同じ教官組織に組み込まれることで、設立後の数年間は各専門分野のお互いの主張を理解し、共通のものと独自のものをうまくバランス

させていくことが難しい。

3. 2 学部としての新たな試み

新構想型学部として新たに設立された以上、学部としては既存の専門学部にはない特色を打ち出し、新たな教育方式を確立していかねばならない。

現段階での日本の大学の新たな試みの多くは、マルチディシプリナリによる文系と理系の学問の融合である。その手法は、学部内に大きな柱として何かを（総合、人間、情報・コミュニケーション、環境）中心に据え、それに既存の文系・理系の学問を関連づけたカリキュラム編成により、学生自身の中で両者を融合させていくといったものである。その際、多少のインターディシプリナリの融合された新しいカリキュラム内容を一部に含む場合もある。

マルチディシプリナリを実現させるための各学部の試みは、大きく分けると3つに分けられる。

- 1) 大学学部で送る4年間は、学校側のカリキュラムとして、広く浅くなるべく多くの異分野の学問を学ばせる。学生には、ある時期に自分の進路についての意志決定を行わせるが、その専門科目以外にも4年間を通じて幅広い知識を身につけさせ、社会の変化に臨機応変に対応していく事の出来る学生を育てる。
- 2) 学校側は、学生の将来についての意志決定を学生自身に委ねる。学校側のカリキュラムとしては、強制的に異分野の学問を履修しなければならないということはない。要するに、自分の専門科目以外に不必要と思われる異分野の学問を学ぶ必要は無い、という考え方である。この意志決定を学生自身に行わせる試みは、学生自身が問題意識を持ち、その問題解決を学生自身で行うという問題解決型の学生を育てる。
- 3) 学部内の文系・理系の教授自身が、具体的な社会的課題を念頭に置いて共同で1つの学際的な問題意識を持ち、その問題解決に取り組む。

1) の場合は、異分野の学問を卒業するまでになるべく多く修得し、幅の広い知識を持つ人材を育成しようとしている。この場合、なるべく知識の幅を広くしようと求める反面、1つの学問について深く勉強することができないので、どうしても既存の専門学部の学生と比較すると専門分野における学力レベルが低くなってしまいう傾向にある。

具体的な授業形態は、大学1年生または2年生までの間は、学生をある特定の進路（コース・専攻・講座）に分けることはせずに、学生全員を幅広い学問分野に触れさせ、自分自身で今後の自分の進むべき道を見極めさせる。その後、2年生または3年生の時点で進路を決定させる。ある進路が決まったとしても、異分野の科目を履修することは可能とする。また、それを必修として学ばせる場合もある。

2) の場合は、異なる分野の学問を自由に選択できるので、学生自身が望めば理系と文系の学問を半分ずつ履修して卒業することも可能である。しかし、実際には文系の学生が理系の分野の

学問を履修することは難しい。また、必修として異分野の学問を履修しなければならないわけではないので、結果的にはある片方の専門分野に偏りやすく（既存の専門学部とやっていることが変わらない）、新構想型学部の利点を存分に生かしきれないということになりうる。

具体的な授業形態は、入学当初から4年生までを通して学生は、コースや専攻といった学部内学科に属さない。学生は、学部内の全ての講義を履修可能なシステムになっている。学生は、学校側のある程度のアウトラインには従わざるを得ないものの、自分なりの年間カリキュラムを自由に編成し、在学中の4年間を通じて、自分の将来について自分で意志決定を行い、学んでいく。

1)、2)に共通していることは、新構想型学部の学生は、学生自身が異なる専門分野を履修しながら、ある学年で自分の進むべき道（コースや講座等）を決めなければならない（意志決定）ということである。既存の専門学部では、ある程度のルールが敷かれていて、否が応でもそのルールに乗らざるを得ない傾向が強い。しかし、新構想型学部では、自分のなりたいものに、学生が100人いれば100種類の職種に就けるような学部である。したがって、自分自身で卒業するまでの4年間に意志決定のできた者は、十分に新構想型学部の利点を活用できた者である。しかし、意志決定できなかった者は、何事も中途半端なまま大学に残る、もしくは就職してしまうことになる。これでは、新構想型学部にきた意味が全くなくなってしまう。このような学生をなるべく出さないようにするということが、今後の大きな課題である。

3)の場合は、1)、2)の学生をどのように教育していくかという観点とは違い、新構想型学部は、今後社会的役割をどう果たしていくかという試み（学際研究体制の基礎づくり）である。既存の専門学部における研究は、ある一つの専門領域のみの中で行われているのが常である。この環境では、複雑化している社会問題に今後対応していくことは難しい。また、実際に学部間の壁を越えて研究を行うことは、既存の縦割り構造の日本の大学では、ほとんど不可能に近い。新構想型学部には、複数の分野の専門家が集まっているので、学部内でこれらの社会問題をテーマとして学際研究を行うことが容易であるし、また今後、学際研究の体制を整備していく上で必要不可欠なものである。しかし現在、実際に行われている数は少ない。

3. 3 新構想型学部の学生

学際化という新しい試みの学部へ入学を希望する学生は、どのような学生なのであろうか。既存の専門学部へ入学を希望する学生と違いがあるのであろうか。

3. 3. 1 学生の質

高校生の時から自分の進路について決まっている学生は、迷わずそれらを専門的に学ぶことが出来る専門学部を志すと考えられる。次に、高校時代、文系・理系を専攻して学んできた学生の大半は、そのまま文系・理系の専門学部へ入学すると考えられる。

では、どのような学生が新構想型学部を志願するのであろうか。そのタイプは大きく分けて2

つである。

- 1) 高校時代から明確に、大学では学際教育を受け、将来は学際領域の研究や仕事を行いたいと思って（意志決定が出来ている）入学してくるタイプ
- 2) 高校時代には自分の将来について何も考えず、受験テクニックや地の利、新設学部としての魅力に惹かれて（意志決定が出来ていない）入学してくるタイプ。

1) のタイプの学生は、早いうちにある程度の意志決定が出来ているため、入学後も学際領域という新しい学問領域のもとで、自分の進路についての意志決定を早期に出来る。ただ、問題は学生が思い描いてきた学部と実際の学部とにギャップが生じた場合、そのギャップを両者が上手く解消できるかというところにある。

2) のタイプの学生は、在学中の4年間で自分の将来について意志決定をしなければならない。意志決定を行う時期は学校によって異なってくるが、遅かれ早かれ自分で決めなければならない。この意志決定が在学中に出来ない場合は、無業者や留年者を増加させる要因にもなりかねない。

実際に入学してくる学生はほとんどの2) のタイプの学生が多い。しかし、新構想型学部が新設されて数年が経過した現在、1) のタイプの学生がでてきている。

3. 3. 2 入試形態

新構想型学部の入試形態について述べる。学際というからには、ある専門分野の学生だけに限らず、他の専門分野の学生も混在している。では、入学試験を行う大学は、どのような試験を行っているのだろうか。それは、次の3つの場合がある。

- 1) 文系・理系の試験科目があり、学生は自分の得意分野を選択することが出来る。
- 2) ある特定の科目の中から、自分の得意科目を選択する事が出来る。
- 3) 学校側で決められた試験科目以外選択することは出来ない。

1) や2) の形態の入試選抜を行った結果は、実際に入学してくる学生の文系・理系の比率が、ほぼ半々である。また、学部内の男女の比率は約40%の学生が女性である（表2-7参照）。学部としては、今後なるべく多様な人材を集めるために、入試形態の多様化を試みる声が挙がっている。

3. 3. 3 学部と学生間のミスマッチ

新しい試みの学部である以上、既存の専門学部にあるような固定観念はなく、学部の名称とパンフレット等の情報から、学生はそれぞれイメージを持って入学して来る。そして、実際に入学してみた時点で、その学部が自分の持つイメージにほぼ近いと感じる者もいれば全く異なると感

じる者もいる。学部と学生との間にミスマッチが生じていないとすれば、それは問題ではない。しかし、大小の差はあれど必ず何かミスマッチが生じているのが現実である。これより、大きな2つのミスマッチとそれに対する学部の対応について例を述べる。

ミスマッチ1

新構想型学部の名称は、総合的・文理融合的な名称が付けられている。しかし、実際の新構想型学部のほとんどは、マルチディシプリナリの構想であり、インターディシプリナリの構想の学部は数が少ない。マルチディシプリナリは、一人の学生に文系・理系の専門の教官がそれぞれ教えることであって、複数の専門分野が融合して出来た新しい体系の学問の教育を行う、インターディシプリナリとは異なる。

ある学生が、インターディシプリナリな学部と思って入学してみたものの、実際に学んでみると行われていることは既存の専門学部とほぼ変わらないと感じる。マルチディシプリナリの構想で設立されているのだから仕方がない。インターディシプリナリの構想の学部が出来ないのは、教官、つまり教育する側の体制がまだ十分できていないからである。教官の知識が狭い範囲での専門領域でしかない以上、複合領域の講義を十分に行うことは不可能である。また、複合領域について講義が出来る教官自体、まだ日本には数少ない。

今後は、マルチディシプリナリから発展してインターディシプリナリな学部が設立されて来る可能性が高い。そのためにも、教官自身の専門領域拡大等の努力と、複合領域の専門家を育成していくための、早期の体制の整備が必要不可欠である。

ミスマッチ2

意志決定が出来ずに入学してきた学生の多くは、このような新しい試みの学部においては、自分はここでどうしたらいいのかという迷いが生じる。意志決定を在学中に自分自身で出来なければ、その学生はこの学部に来た意味がなくなってしまうし、学生自身が非常に中途半端になってしまう。そこで、学部として学生自身に意志決定をさせるために、いろいろな対策を行っている。

チューター制：一人の専任の講師がある特定数の学生を担当し、学生の勉強や生活の不安についてカウンセリングを行う。

オフィス・アワー：学生と教官の会話の時間。学生は好きな教官のところで会話をすることができる。

フレッシュマンキャンプ：入学生を対象に1泊2日でオリエンテーションを行う。そこには教官や上級生も参加し、勉強や学生生活の問題点について話し合い、今後の学生生活を送る上での情報交換の場としている。

新構想型学部の既存の学部にはない大きな利点は、ある専門領域にとらわれずに自分の視野を大きく広げ、その中から自分のやりたいことを見つけだし、それについて学習していくことが出来ることである。とすれば、なるべく多くの学生にこの利点を理解してもらい、在学中の4年間で自分の進路について、意志決定を行ってもらわねばならない。上記のような、学生自身の意志決

定を支援するための対応策を充実していくことが、今後さらに必要である。

3. 4 学生の卒業後の進路

新構想型学部を卒業する学生の進路は、どのような職種に就職しているのだろうか。また、理・工学部で求められているような高キャリアの風潮を受け、ここでも、大学院への進学率は高いのだろうか。

3. 4. 1 進路状況

まず就職に関してであるが、卒業生は自分で意志決定が出来ている者が多いので、企業の規模や名前にこだわることなく、就職先での自分の職種に重点を置いて就職活動を行っている。従って、ある特定の分野に偏ることなく、多種多様な分野への就職が決まっている。しかし、長引く不況のため学生の就職難は続いており、自分の希望する企業へ就職できない学生も少なくない。また、自分がある一つの分野の人間に決めることが出来ず、就職することが出来ない学生（就職浪人）もいる。

次に進学に関してであるが、これには不況による就職難を回避するためとやはり最近の社会の高キャリアを望む風潮が拍車をかけ、大学院への進学者は年々増加している。

3. 4. 2 学生と企業間のミスマッチ

学生と企業間においても、新構想型学部の実態が把握されていないことに起因するミスマッチが生じている。本項では、新構想型学部の卒業生が、企業へ就職する際に生じたミスマッチについて例をいくつか述べる。

ミスマッチ1

まだ新構想型学部の社会的認知度は低く、企業側は新構想型学部についてよく知らない。従って、学生は自分の学部について説明し、自分がどのような人間なのかをアピールする必要がある。しかし、この場合の学部の説明は、企業側に分かるように既存の専門学部の場合に例えて説明する事が多く、学部の特徴を十分に説明することは難しい。また、企業側で設定する文系・理系という枠に新構想型学部の名前がない場合があり、入社試験の受付をしてもらっただけでも困難な場合がある。しかし反面、企業はこれからの時代、何かこれまでと違った新しいことをしなければ生き残れないことを実感し、その新しいことを模索している。そこで、新しい教育を受けてきた人材を採用し、社内の活性化を促したいという理由から、新構想型学部の卒業生を欲する声も聞かれている。

ミスマッチ2

学生は、文系・理系という縦割り構造の教育を受けてきていないので、企業の募集する文系人材・理系人材という分類に戸惑いを持つ。学際的教育を受けてきた学生にとって就職の際、自分

を文系か理系かに半ば強引に当てはめなければならないことに、強く反発している。また、卒業までに多様な可能性を追求してきたことから、卒業時に1つのことに決められず、就職活動に入ることが出来ない学生もいる。

ミスマッチ3

最近の企業は、学部で何を学んできたかということを重視しない傾向がある。企業は、学部卒業者に専門性を求めているわけではない。つまり人物本位で採用するのであるが、そうすると大学側では何を学生に学ばせればいいのか分からないといった問題が生じる。

これは、企業と学生というよりは、むしろ企業と大学のミスマッチである。企業が大学にあまり狭い専門性を望んでいないのであれば、むしろ大学のできることは、企業がどんな社内教育を行うにしても、社会がどんな状況に陥ったとしても、それに対応することが出来る基礎的能力を学生に身につけさせることかもしれない。しかし、これではこれまでの教養部と何ら変わらないことにもなりうる。

ミスマッチ4

企業側が、学部卒業生のイメージを勝手に作り上げ、卒業生全員にそのイメージを当てはめようとする。

これは、ミスマッチ1と原因は同じである。企業が学部の実態を知らないが上に、勝手なイメージを作ってしまうことに原因があると考えられる。

ミスマッチ5

セメスター制度により9月入学を認めている大学では、その制度で学習している学生も少なからずいる。これらの学生が卒業し就職する場合に、企業側では中途採用者としての受け皿がほとんどであるため、半年間浪人せざるをえない状況となっている。

これは、新構想型学部に限った企業とのミスマッチではなく、全学部に共通している問題かもしれない。日本は、企業に限らず学校も社会全体が主に4月始まりである。外資系の企業もしくは一部の大学のみで、9月始まりが導入されている。ということは、このミスマッチは、日本の社会全体が変わらなければ解決できない問題である。

3. 5 学部の今後の課題

前項までの中にもいくつか、学部の今後の課題に触れたものが含まれていたが、本項では前項までのカテゴリーには含まれない学部としての今後の課題について述べる。

1) 学会の問題

新構想型学部の学生を学会に入会させようとするとき、その学生の専門にあった学会があることは少ない。学生が自分の専門分野について研究し、開発しようとするほど、就

職や既存の専門学会で認められる仕事とは、離れていってしまうこともある。つまり、社会が早期に学際研究の学会等の整備・拡充を図っていかねばならない。

2) 大学院の問題

新構想型学部卒業生の中には、大学院に進学する者もいる。既存の大学院では、新構想型学部卒業生は、既存の専門学部の卒業生と一緒に学習することになる。この場合、どうしてもその専門学科において、レベルの差が生ずる。新構想型学部の学生は、専門的学問の積み上げが足りない分、既存の大学院に進学した場合、苦勞してしまう。

この問題を解決するのは、なかなか難しい。もしこれについて何らかの対応をするのであれば、1つの方法は、学部の中で、学部卒で就職する者には複合領域を十分に学んでもらい、大学院に進学する者には、ある時期から専門的学問を深く学ばせることである。しかしこうなると、学部としての一体感がなくなってしまう。もう1つの方法は、新構想型学部の上に大学院を設立することである。学部と大学院を一体化して学際についての教育・研究に取り組む。学部では教養教育をきちんと学び、大学院で専門教育を行う、いわゆるレイトスペシャリゼーションである。こうして、学際研究の社会的立場を確立させる。現状は、徐々に大学院を設立する大学が増えてきているが、まだまだその数は少ない。

3) 学際教育の専門性

学際教育は、学部で過ごす4年間で本当に十分に行えるのか。新構想型学部の学生と既存の専門学部の学生とでは、新構想型学部の学生の方がレベルを低く見られがちである。実際、どうしても複数の学問分野を学ぶ以上、ある特定の専門分野における学問レベルが低くなってしまうことはやむを得ないことである。学生側から学部内で物理系の学問を行うのであれば、理学部での物理のレベルまでやって欲しいという要求もある。しかし、それを100%行うことは他の分野の学問に影響を及ぼすことになり、ある特定の学問のみ、専門性を高めることは不可能である。

では、学際教育の専門性はどのように追求して行くべきなのか。マルチディシプリナリ的手法で学際化を行う以上、学部卒の学生に社会で通用する専門知識が身に付くことは非常に難しい。今後、新体系の専門分野が新たに誕生し、インターディシプリナリの学部が増加して、入学当初から専門分野の学問の勉強が出来るようになれば、話は別である。従って、現段階において学際教育の専門性を追求するには、学際教育が行える大学院の存在が必要不可欠である。

3. 6 その他

本項では、学部で共通する2つの問題について述べる。1つは、国立大学と私立大学の問題。もう一つは、文理融合の在り方についてである。

1) 国立大学と私立大学

国立大学と私立大学を訪問して、対照的だったことは、施設や設備の問題である。私立大学の場合、新設される学部は、学生の受け入れ態勢は万全に整備されているところが多い。ところが、国立大学の場合、とくに教養部を母体とした改編による新設の場合は、理念のみがあり施設は昔のままである。つまり、スクラップ・アンド・ビルドでまかなうということになるが、実際は、様々な要因により古い建て屋をスクラップすることが出来ず、また予算の都合で新しい建て屋を作ること（ビルド）が出来ない状態が続いている。この場合、施設や設備の拡充が図られる間は、学生に対して専門的にレベルが低い教育しかできない。また教養的にもあまり結果のでない学生が育ってしまう可能性があり、学部の新設自体が正しかったのかどうか、数年経って見ないことには評価することが出来ないという状況になっている。

2) 文理融合の在り方

学際というと、文系と理系の学問の融合を指すことが多いが、文系・理系という定義がそもそも曖昧であり、両者は結果としてある問題解決のために最終的には結びついていくことになる。これまでは、文系・理系の専門分野で、それぞれ様々な問題解決がなされてきた。しかし、いま起こっている複合領域の問題は、文系・理系それぞれの分野のみでは解決できない問題に発展してきており、その解決に向けて必然的に両者が融合してきている。

もともとは、文系・理系といった分類はなかったはずである。実際に外国には、文系・理系といった言葉はなく、日本特有のものである。

いま、学問が既存の学問の枠を遙かに越えたものになってきているのだから、大学での教育体制もそれに適応したものに変えて行かねばならない。大学全体でそういう意識を持って変わっていけば、新構想型学部の抱える問題というものは徐々に解決されていくはずである。

4. まとめ

文部省「学校基本調査報告」による統計、および各大学におけるインタビュー調査の結果から、日本の新構想型学部の現時点における実態は、以下の通りである。

- ・過去7年間に新設された学部の多くは、学際的な学部であり、その学際化の手法はマルチディシプリナリである。
- ・新構想型学部は、大きく分けて総合系学部、人間系学部、情報・コミュニケーション系学部、環境系学部の4つに分類することができる。
- ・新構想型学部の新設が各大学で相次いでおり、必然的にその入学志願者数、入学者数の絶対数は増加傾向にある。特に、総合系学部、人間系学部、情報・コミュニケーション系学部の増加率が大きい。既存の専門学部である理・工学部においては、ほぼ横ばいである。
- ・新構想型学部の入学倍率は、どの学部も新設された初年度の値は高い傾向にあり、その後徐々に落ち着くため、7年間の経過を見ると減少傾向になりがちである。しかし、新構想型学部の値の方が、既存の専門学部である理学部や工学部の値と比較すると高い。
- ・新構想型学部に対する女子学生の人気は、既存の専門学部である理学部や工学部と比較すると断然高い。新構想型学部の入学者に占める女子の割合は約40%であり、理・工学部は10%前後である。しかし、女子割合の値は新構想型学部の方が高いものの、過去7年間における増加率の伸びは理・工学部の方が大きい。
- ・新構想型学部の学際的の試みには3つある。
 - 1) 在学中の4年の間になるべく多くの他分野の学問を学ばせ、学校卒業後、新たな社会の変化に臨機応変に対応していくことの出来る学生を育てる。
 - 2) 学生自身が問題意識を持ち、自分でその問題解決を行うことができる、問題解決型の学生を育てる。
 - 3) 学部内の文系・理系の教授達が共同で学際領域の問題解決に取り組む。
- ・新構想型学部の大きな利点は、入学してから自分の進路について意志決定が出来るところである。しかし反面、意志決定が出来ない学生には、この利点が不利になることもある。
- ・新構想型学部の卒業生の中で就職を希望する学生は、自分の進路について意志決定が出来ている場合が多いので、企業の規模や名前にこだわることなく、自分のやりたいことが出来る分野への就職が決定している学生が多い。しかし、就職活動時に学部の社会的認知度の低さや企業の既存の文系・理系といった縦割り構造の残存により、不利を被っている学生もいる。
- ・新構想型学部は、文系・理系の学科の講義を相互に受けることが可能なカリキュラム構成にすることにより、マルチディシプリナリによる学際教育を行っている。インターディシプリナリという、1つの学部で学際理念に基づいた教育を行う手法もあるが、このような複合領域の教育が行える教授自体まだ極めて少数であり、今後これらの専門家を増加させていくために、早期の体制の整備・拡充が望まれる。
- ・新しい試みの学部であるため、様々なミスマッチが学部と学生の間で生じる場合がある。こ

の場合、学部側ではなるべく多くの学生に学部の理念を理解してもらい、学んでもらうために、いろいろな対応策を講じて学生に対応している。

- ・学際という新しい領域の学問をどのように今後発展させていくかという事を、各学部で試行錯誤している。それは、新構想型学部自体の独自性を強調していくことでもあるが、大学院を含めた教育・研究体制の早期確立が大きな課題である。
- ・学部段階での学際には、主にマルチディシプリナリとインターディシプリナリの手法がある。マルチディシプリナリの利点は、学生自身に学ぶ学問の選択肢があり、意志決定が出来ることである。インターディシプリナリは、新しい体系の学問分野を学ぶ場であるので、その時点で既存の専門分野と変わらないということになり、マルチディシプリナリの利点である学生の自由度は失われてしまう恐れがある。

これらのことから、新構想型学部とは、まだ出来て間もない学際領域を学ぶ場所であり、新しいが故に様々な問題を抱えているのが実状である。しかし、いま起こっている学際領域の社会問題を解決する上で、これらの知識を持つ人材の育成は必須である。また、大学入学までの受験競争を乗り切ったあとに、自分を見つめ直す時間がもてることは、個人の個性をより伸ばすことができ、新構想型学部の大きな利点の1つである。

このように、新構想型学部は将来にむけて大きな期待がかかる学部である。その為にも、これまでに挙げた課題を克服し、学際領域を学ぶ場として、土台をしっかりと築いていかねばならない。このような観点から、今後関連する調査研究および議論がさらになされることを期待する。

参考文献

- 〔1〕 文部省、「学校基本調査報告」
- 〔2〕 東洋経済新報社、「日本の大学 1998年度版」
- 〔3〕 一松 信 監修、赤司 秀明 著、(1997)「超情報化社会のキーワード 学際研究入門」、(株)コスモトゥーワン

謝辞

本調査報告のインタビュー調査に当たっては、各大学の学部の教官及び事務部門の方に貴重な時間を割いていただき、統計や文献等にはない有益な情報を提供していただいた。このため、本調査報告は、これらの方々のご協力に負うところが非常に大きい。この場を借りて、ご協力いただいた方々に対し、心から感謝の意を表する。

5. 統計表

以下の統計表は、全て「文部省 学校基本調査報告」による。

表5-1 系統別新構想型学部の入学者志願者数

系統別学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	男性	8,531	7,580	6,477	15,460	26,659	19,695	19,045
	女性	2,429	2,858	2,726	6,191	11,042	9,295	9,330
	合計	10,960	10,438	9,203	21,651	37,701	28,990	28,375
人間系学部	男性	8,406	9,547	10,843	14,918	16,859	22,745	23,517
	女性	10,242	11,422	15,268	18,634	20,446	28,812	34,666
	合計	18,648	20,969	26,111	33,552	37,305	51,557	58,183
情報・コミュニケーション系学部	男性	57,185	67,333	82,563	85,773	81,691	92,567	105,519
	女性	5,644	6,774	10,608	10,104	11,037	13,128	16,613
	合計	62,829	74,107	93,171	95,877	92,728	105,695	122,132
環境系学部	男性	7,112	7,112	6,066	5,585	5,114	10,319	6,123
	女性	2,074	2,405	2,490	2,403	4,472	8,002	6,295
	合計	9,186	9,517	8,556	7,988	9,586	18,321	12,418
新構想型学部全体	男性	81,234	91,572	105,949	121,736	130,323	145,326	154,204
	女性	20,389	23,459	31,092	37,332	46,997	59,237	66,904
	合計	101,623	115,031	137,041	159,068	177,320	204,563	221,108

表5-2 系統別新構想型学部の入学者数

系統別学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	男性	717	653	617	934	1,355	1,583	1,538
	女性	371	389	461	658	1,036	1,146	1,182
	合計	1,088	1,042	1,078	1,592	2,391	2,729	2,720
人間系学部	男性	704	734	977	1,503	1,244	1,737	1,788
	女性	1,410	1,188	1,903	2,399	2,495	3,593	4,123
	合計	2,114	1,922	2,880	3,902	3,739	5,330	5,911
情報・コミュニケーション系学部	男性	4,172	4,911	6,368	6,492	8,222	9,680	10,900
	女性	768	940	1,548	1,591	1,962	2,301	3,396
	合計	4,940	5,851	7,916	8,083	10,184	11,981	14,296
環境系学部	男性	398	298	261	496	397	688	723
	女性	189	163	199	271	734	850	841
	合計	587	461	460	767	1,131	1,538	1,564
新構想型学部全体	男性	5,991	6,596	8,223	9,425	11,218	13,688	14,949
	女性	2,738	2,680	4,111	4,919	6,227	7,890	9,542
	合計	8,729	9,276	12,334	14,344	17,445	21,578	24,491

表 5 - 3 系統別新構想型学部の入学倍率

系統別学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部	男性	11.9	11.6	10.5	16.6	19.7	12.4	12.4
	女性	6.5	7.3	5.9	9.4	10.7	8.1	7.9
	合計	10.1	10.0	8.5	13.6	15.8	10.6	10.4
人間系学部	男性	11.9	13.0	11.1	9.9	13.6	13.1	13.2
	女性	7.3	9.6	8.0	7.8	8.2	8.0	8.4
	合計	8.8	10.9	9.1	8.6	10.0	9.7	9.8
情報・コミュニケーション系学部	男性	13.7	13.7	13.0	13.2	9.9	9.6	9.7
	女性	7.3	7.2	6.9	6.4	5.6	5.7	4.9
	合計	12.7	12.7	11.8	11.9	9.1	8.8	8.5
環境系学部	男性	17.9	23.9	23.2	11.3	12.9	15.0	8.5
	女性	11.0	14.8	12.5	8.9	6.1	9.4	7.5
	合計	15.6	20.6	18.6	10.4	8.5	11.9	7.9
新構想型学部全体	男性	13.6	13.9	12.9	12.9	11.6	10.6	10.3
	女性	7.4	8.8	7.6	7.6	7.5	7.5	7.0
	合計	11.6	12.4	11.1	11.1	10.2	9.5	9.0

注：入学倍率の数値＝入学志願者数／入学者数である。

表 5 - 4 総合系学部における入学志願者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部全体	男性	8,531	7,580	6,477	15,460	26,659	19,695	20,126
	女性	2,429	2,858	2,726	6,191	11,042	9,295	9,649
	合計	10,960	10,438	9,203	21,651	37,701	28,990	29,775
総合人間学部	男性				726	766	785	693
	女性				124	165	176	181
	合計				850	931	901	874
総合科学部	男性	1,854	1,912	1,677	1,701	1,692	1,339	1,964
	女性	949	933	1,055	1,286	1,193	1,141	1,441
	合計	2,803	2,845	2,732	2,987	2,885	2,480	3,405
総合管理学部	男性					3,705	738	549
	女性					2,510	615	583
	合計					6,215	1,353	1,132
総合政策学部	男性	6,677	5,668	4,800	13,033	8,018	9,784	8,708
	女性	1,480	1,925	1,671	4,781	3,877	5,094	4,706
	合計	8,157	7,593	6,471	17,814	11,895	14,878	13,414
総合情報学部	男性					12,478	7,049	7,131
	女性					3,297	2,269	2,419
	合計					15,775	9,518	9,550
総合理工学部	男性							1,081
	女性							319
	合計							1,400

表5-5 総合系学部における入学者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部全体	男性	717	653	617	934	1,355	1,583	1,785
	女性	371	389	461	658	1,036	1,146	1,260
	合計	1,088	1,042	1,078	1,592	2,391	2,729	3,045
総合人間学部	男性				112	113	107	109
	女性				21	24	26	27
	合計				133	137	133	136
総合科学部	男性	292	344	331	319	347	342	330
	女性	231	257	271	324	301	318	305
	合計	523	601	602	643	648	660	635
総合管理学部	男性					126	144	141
	女性					155	156	177
	合計					281	300	318
総合政策学部	男性	425	309	286	503	375	684	612
	女性	140	132	190	313	354	464	475
	合計	565	441	476	816	729	1,148	1,087
総合情報学部	男性					394	306	346
	女性					202	182	198
	合計					596	488	544
総合理工学部	男性							247
	女性							78
	合計							325

表5-6 総合系学部における入学倍率

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
総合系学部全体	男性	11.9	11.6	10.5	16.6	19.7	12.4	11.3
	女性	6.5	7.3	5.9	9.4	10.7	8.1	7.7
	合計	10.1	10.0	8.5	13.6	15.8	10.6	9.8
総合人間学部	男性				6.5	6.8	7.3	6.4
	女性				5.9	6.9	6.8	6.7
	合計				6.4	6.8	6.8	6.4
総合科学部	男性	6.3	5.6	5.1	5.3	4.9	3.9	6.0
	女性	4.1	3.6	3.9	4.0	4.0	3.6	4.7
	合計	5.4	4.7	4.5	4.6	4.5	3.8	5.4
総合管理学部	男性					29.4	5.1	3.9
	女性					16.2	3.9	3.3
	合計					22.1	4.5	3.6
総合政策学部	男性	15.7	18.3	16.8	25.9	21.4	14.3	14.2
	女性	10.6	14.6	8.8	15.3	11.0	11.0	9.9
	合計	14.4	17.2	13.6	21.8	16.3	13.0	12.3
総合情報学部	男性					31.7	23.0	20.6
	女性					16.3	12.5	12.2
	合計					26.5	19.5	17.6
総合理工学部	男性							4.4
	女性							4.1
	合計							4.3

表5-7 人間系学部における入学志願者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
人間系学部	男性	8,406	9,547	10,843	14,918	16,859	22,745	23,517
	女性	10,242	11,422	15,268	18,634	20,446	28,812	34,666
	合計	18,648	20,969	26,111	33,552	37,305	51,557	58,183
人間科学部	男性	8,406	9,547	9,364	10,160	8,088	7,162	7,302
	女性	4,535	4,850	6,070	8,535	8,141	8,984	9,863
	合計	12,941	14,397	15,434	18,695	16,229	16,146	17,165
発達科学部	男性				739	649	887	621
	女性				668	628	785	582
	合計				1,407	1,277	1,672	1,203
人間文化学部	男性						2,783	414
	女性						2,529	611
	合計						5,312	1,025
人間関係学部	男性						1,641	1,971
	女性	1,641	1,528	2,455	1,730	1,937	2,779	3,810
	合計	1,641	1,528	2,455	1,730	1,937	4,420	5,781
人間学部	男性			531	3,672	7,787	8,450	11,033
	女性			230	2,395	4,935	6,938	11,326
	合計			761	6,067	12,722	15,388	22,359
人間社会学部	男性			948	347	335	1,822	2,176
	女性	4,066	5,044	6,150	4,882	4,280	5,951	6,544
	合計	4,066	5,044	7,098	5,229	4,615	7,773	8,720
人間環境学部	男性						0	0
	女性						448	425
	合計						448	425
人間生活学部	男性			0	0	0	0	0
	女性			363	424	525	398	1,505
	合計			363	424	525	398	1,505

表5-8 人間系学部における入学者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
人間系学部	男性	704	734	977	1,503	1,244	1,737	1,788
	女性	1,410	1,188	1,903	2,399	2,495	3,593	4,123
	合計	2,114	1,922	2,880	3,902	3,739	5,330	5,911
人間科学部	男性	704	734	787	817	712	745	725
	女性	531	535	699	1,095	1,015	1,303	1,300
	合計	1,235	1,269	1,486	1,912	1,727	2,048	2,025
発達科学部	男性				129	117	122	134
	女性				151	164	161	146
	合計				280	281	283	280
人間文化学部	男性						78	51
	女性						159	113
	合計						237	164
人間関係学部	男性						93	63
	女性	233	294	285	299	283	441	446
	合計	233	294	285	299	283	534	509
人間学部	男性			148	502	373	502	676
	女性			70	254	273	425	785
	合計			218	756	646	927	1,461
人間社会学部	男性			42	55	42	197	139
	女性	646	359	710	470	624	859	801
	合計	646	359	752	525	666	1,056	940
人間環境学部	男性						0	0
	女性						95	94
	合計						95	94
人間生活学部	男性			0	0	0	0	0
	女性			139	130	136	150	438
	合計			139	130	136	150	438

表5-9 人間系学部における入学倍率

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
人間系学部全体	男性	11.9	13.0	11.1	9.9	13.6	13.1	13.2
	女性	7.3	9.6	8.0	7.8	8.2	8.0	8.4
	合計	8.8	10.9	9.1	8.6	10.0	9.7	9.8
人間科学部	男性	11.9	13.0	11.9	12.4	11.4	9.6	10.1
	女性	8.5	9.1	8.7	7.8	8.0	6.9	7.6
	合計	10.5	11.3	10.4	9.8	9.4	7.9	8.5
発達科学部	男性				5.7	5.5	7.3	4.6
	女性				4.4	3.8	4.9	4.0
	合計				5.0	4.5	5.9	4.3
人間文化学部	男性						35.7	8.1
	女性						15.9	5.4
	合計						22.4	6.3
人間関係学部	男性						17.6	31.3
	女性	7.0	5.2	8.6	5.8	6.8	6.3	8.5
	合計	7.0	5.2	8.6	5.8	6.8	8.3	11.4
人間学部	男性			3.6	7.3	20.9	16.8	16.3
	女性			3.3	9.4	18.1	16.3	14.4
	合計			3.5	8.0	19.7	16.6	15.3
人間社会学部	男性			22.6	6.3	8.0	9.2	15.7
	女性	6.3	14.1	8.7	10.4	6.9	6.9	8.2
	合計	6.3	14.1	9.4	10.0	6.9	7.4	9.3
人間環境学部	男性							
	女性						4.7	4.5
	合計						4.7	4.5
人間生活学部	男性							
	女性			2.6	3.3	3.9	2.7	3.4
	合計			2.6	3.3	3.9	2.7	3.4

表5-10 情報・コミュニケーション系学部における入学志願者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
情報・ コミュニケーション系学部	男性	57,185	67,333	82,563	85,773	81,691	92,567	105,519
	女性	5,644	6,774	10,608	10,104	11,037	13,128	16,613
	合計	62,829	74,107	93,171	95,877	92,728	105,695	122,132
情報文化学部	男性					2,372	1,000	1,013
	女性					710	400	409
	合計					3,082	1,400	1,422
情報学部	男性	11,157	10,749	19,342	19,907	16,993	16,362	20,923
	女性	1,291	1,315	2,029	2,267	1,982	1,841	2,602
	合計	12,448	12,064	21,371	22,174	18,975	18,203	23,525
社会情報学部	男性		2,100	2,218	2,013	2,427	4,417	3,809
	女性		142	2,644	1,390	2,536	2,860	3,316
	合計		2,242	4,862	3,403	4,963	7,277	7,125
都市情報学部	男性						1,109	1,173
	女性						192	191
	合計						1,301	1,364
経済情報学部	男性	2,953	3,388	2,992	2,862	3,600	9,496	7,470
	女性	403	451	485	471	518	738	736
	合計	3,356	3,839	3,477	3,333	4,118	10,234	8,206
経営情報学部	男性	39,065	47,655	55,224	56,358	49,408	47,900	53,473
	女性	3,587	4,415	4,994	5,209	4,345	4,773	5,609
	合計	42,652	52,070	60,218	61,567	53,753	52,673	59,082
文化情報学部	男性					989	2,075	1,440
	女性					181	468	516
	合計					1,170	2,543	1,956
情報科学部	男性	2,292	2,220	1,692	1,495	3,560	2,312	5,195
	女性	169	303	302	296	453	379	632
	合計	2,461	2,523	1,994	1,791	4,013	2,691	5,827
情報社会科学部	男性						1,459	1,181
	女性						455	349
	合計						1,914	1,530
情報工学部	男性	1,718	1,221	1,095	3,138	2,342	4,377	5,980
	女性	194	148	154	471	312	407	601
	合計	1,912	1,369	1,249	3,609	2,654	4,784	6,581
流通情報部	男性							642
	女性							58
	合計							700
コミュニケーション学部	男性						2,060	1,398
	女性						615	582
	合計						2,675	1,980
国際コミュニケーション学部	男性							1,822
	女性							1,012
	合計							2,834

表5-11 情報・コミュニケーション系学部における入学者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
情報・ コミュニケーション系学部	男性	4,172	4,911	6,368	6,492	8,222	9,680	10,900
	女性	768	940	1,548	1,591	1,962	2,301	3,396
	合計	4,940	5,851	7,916	8,083	10,184	11,981	14,296
情報文化学部	男性					282	204	220
	女性					159	120	104
	合計					441	324	324
情報学部	男性	744	1,011	1,740	1,606	1,940	2,236	1,988
	女性	126	153	305	279	315	358	422
	合計	870	1,164	2,045	1,885	2,255	2,594	2,410
社会情報学部	男性		205	189	213	228	488	436
	女性		33	367	374	411	445	746
	合計		238	556	587	639	933	1,182
都市情報学部	男性						209	191
	女性						50	30
	合計						259	221
経済情報学部	男性	217	258	293	300	263	522	462
	女性	65	59	67	97	93	110	103
	合計	282	317	360	397	356	632	565
経営情報学部	男性	2,688	2,885	3,592	3,752	4,458	4,574	5,374
	女性	509	615	717	720	768	822	1,012
	合計	3,197	3,500	4,309	4,472	5,226	5,396	6,386
文化情報学部	男性					222	129	127
	女性					59	92	84
	合計					281	221	211
情報科学部	男性	153	189	184	162	356	372	689
	女性	22	31	30	42	75	67	89
	合計	175	220	214	204	431	439	778
情報社会科学部	男性						122	161
	女性						84	64
	合計						206	225
情報工学部	男性	370	363	370	459	473	701	672
	女性	46	49	62	79	82	96	107
	合計	416	412	432	538	555	797	779
流通情報学部	男性							228
	女性							31
	合計							259
コミュニケーション学部	男性						123	90
	女性						57	66
	合計						180	156
国際コミュニケーション学部	男性							262
	女性							341
	合計							603

表5-12 情報・コミュニケーション系学部における入学倍率

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
情報・ コミュニケーション系学部	男性	13.7	13.7	13.0	13.2	9.9	9.6	9.7
	女性	7.3	7.2	6.9	6.4	5.6	5.7	4.9
	合計	12.7	12.7	11.8	11.9	9.1	8.8	8.5
情報文化学部	男性					8.4	4.9	4.6
	女性					4.5	3.3	3.9
	合計					7.0	4.3	4.4
情報学部	男性	15.0	10.6	11.1	12.4	8.8	7.3	10.5
	女性	10.2	8.6	6.7	8.1	6.3	5.1	6.2
	合計	14.3	10.4	10.5	11.8	8.4	7.0	9.8
社会情報学部	男性		10.2	11.7	9.5	10.6	9.1	8.7
	女性		4.3	7.2	3.7	6.2	6.4	4.4
	合計		9.4	8.7	5.8	7.8	7.8	6.0
都市情報学部	男性						5.3	6.1
	女性						3.8	6.4
	合計						5.0	6.2
経済情報学部	男性	13.6	13.1	10.2	9.5	13.7	18.2	16.2
	女性	6.2	7.6	7.2	4.9	5.6	6.7	7.1
	合計	11.9	12.1	9.7	8.4	11.6	16.2	14.5
経営情報学部	男性	14.5	16.5	15.4	15.0	11.1	10.5	10.0
	女性	7.0	7.2	7.0	7.2	5.7	5.8	5.5
	合計	13.3	14.9	14.0	13.8	10.3	9.8	9.3
文化情報学部	男性					4.5	16.1	11.3
	女性					3.1	5.1	6.1
	合計					4.2	11.5	9.3
情報科学部	男性	15.0	11.7	9.2	9.2	10.0	6.2	7.5
	女性	7.7	9.8	10.1	7.0	6.0	5.7	7.1
	合計	14.1	11.5	9.3	8.8	9.3	6.1	7.5
情報社会科学部	男性						12.0	7.3
	女性						5.4	5.5
	合計						9.3	6.8
情報工学部	男性	4.6	3.4	3.0	6.8	5.0	6.2	8.9
	女性	4.2	3.0	2.5	6.0	3.8	4.2	5.6
	合計	4.6	3.3	2.9	6.7	4.8	6.0	8.4
流通情報学部	男性							2.8
	女性							1.9
	合計							2.7
コミュニケーション学部	男性						16.7	15.5
	女性						10.8	8.8
	合計						14.9	12.7
国際コミュニケーション学部	男性							7.0
	女性							3.0
	合計							4.7

表5-13 環境系学部における入学志願者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
環境系学部	男性	7,112	7,112	6,066	5,585	5,114	10,319	6,123
	女性	2,074	2,405	2,490	2,403	4,472	8,002	6,295
	合計	9,186	9,517	8,556	7,988	9,586	18,321	12,418
環境理工学部	男性						415	431
	女性						94	115
	合計						509	546
環境科学部	男性						4,640	1,045
	女性						1,740	655
	合計						6,380	1,700
環境情報学部	男性	7,112	7,112	6,066	4,614	4,150	4,459	3,980
	女性	2,074	2,405	2,490	2,148	1,820	2,078	1,723
	合計	9,186	9,517	8,556	6,762	5,970	6,537	5,703
環境学部	男性				971	964	805	667
	女性				255	243	307	258
	合計				1,226	1,207	1,112	925
生活環境学部	男性					0	0	0
	女性					2,409	3,783	3,544
	合計					2,409	3,783	3,544

表5-14 環境系学部における入学者数

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
環境系学部	男性	398	298	261	496	397	688	723
	女性	189	163	199	271	734	850	841
	合計	587	461	460	767	1,131	1,538	1,564
環境理工学部	男性						136	132
	女性						32	40
	合計						168	172
環境科学部	男性						118	103
	女性						74	77
	合計						192	180
環境情報学部	男性	398	298	261	278	256	303	314
	女性	189	163	199	193	175	163	148
	合計	587	461	460	471	431	466	462
環境学部	男性				218	141	131	174
	女性				78	40	60	56
	合計				296	181	191	230
生活環境学部	男性					0	0	0
	女性					519	521	520
	合計					519	521	520

表5-15 環境系学部における入学倍率

学部名		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
環境系学部	男性	17.9	23.9	23.2	11.3	12.9	15.0	8.5
	女性	11.0	14.8	12.5	8.9	6.1	9.4	7.5
	合計	15.6	20.6	18.6	10.4	8.5	11.9	7.9
環境理工学部	男性						3.1	3.3
	女性						2.9	2.9
	合計						3.0	3.2
環境科学部	男性						39.3	10.1
	女性						23.5	8.5
	合計						33.2	9.4
環境情報学部	男性	17.9	23.9	23.2	16.6	16.2	14.7	12.7
	女性	11.0	14.8	12.5	11.1	10.4	12.7	11.6
	合計	15.6	20.6	18.6	14.4	13.9	14.0	12.3
環境学部	男性				4.5	6.8	6.1	3.8
	女性				3.3	6.1	5.1	4.6
	合計				4.1	6.7	5.8	4.0
生活環境学部	男性					4.6	7.3	6.8
	女性					4.6	7.3	6.8
	合計					4.6	7.3	6.8

表5-16 理学部、工学部、学部全体における入学志願者数

年度	理学部			工学部			学部全体		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
1990	66,721	13,585	80,306	578,519	22,180	600,699	3,635,820	1,004,160	4,639,980
1991	66,294	14,664	80,958	588,737	27,045	615,782	3,827,284	1,110,583	4,937,867
1992	67,770	17,845	85,615	592,268	31,099	623,367	3,870,436	1,192,426	5,062,862
1993	65,193	19,581	84,774	586,641	36,297	622,938	3,720,736	1,242,127	4,962,863
1994	64,703	21,767	86,470	543,666	38,257	581,923	3,520,429	1,264,951	4,785,380
1995	67,461	24,280	91,741	531,960	41,576	573,536	3,320,789	1,307,065	4,627,854
1996	64,816	24,111	88,927	513,374	46,692	560,066	3,140,422	1,349,008	4,489,430

表5-17 理学部、工学部、学部全体における入学者数

年度	理学部			工学部			学部全体		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
1990	8,872	2,215	11,087	72,435	3,682	76,117	343,694	148,646	492,340
1991	9,142	2,465	11,607	75,937	4,671	80,608	361,234	160,665	521,899
1992	9,278	2,861	12,139	76,800	5,413	82,213	368,996	172,608	541,604
1993	9,617	3,205	12,822	78,567	6,110	84,677	371,451	183,522	554,973
1994	9,363	3,470	12,833	77,481	6,552	84,033	370,106	190,709	560,815
1995	9,678	3,462	13,140	79,629	7,194	86,823	370,091	198,485	568,576
1996	9,244	3,504	12,748	78,938	7,902	86,840	371,274	207,874	579,148

表5-18 理学部、工学部、学部全体における入学倍率

年度	理学部			工学部			学部全体		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
1990	7.5	6.1	7.2	8.0	6.0	7.9	10.6	6.8	9.4
1991	7.3	5.9	7.0	7.8	5.8	7.6	10.6	6.9	9.5
1992	7.3	6.2	7.1	7.7	5.7	7.6	10.5	6.9	9.3
1993	6.8	6.1	6.6	7.5	5.9	7.4	10.0	6.8	8.9
1994	6.9	6.3	6.7	7.0	5.8	6.9	9.5	6.6	8.5
1995	7.0	7.0	7.0	6.7	5.8	6.6	9.0	6.6	8.1
1996	7.0	6.9	7.0	6.5	5.9	6.4	8.5	6.5	7.8